

話者と説得的メッセージに対して聞き手がもつ印象に 話者の自己接触行動が与える影響

Effects of the Speaker's Self-Touch Behavior on the Listener's Impressions of the Speaker and Message

門田 圭祐[†], 渋谷 芳香[†], 関根 和生[†]
Keisuke Kadota, Yoshika Shibuta, Kazuki Sekine

[†] 早稲田大学
Waseda University
k.kadota@aoni.waseda.jp

概要

本研究は、話者の自己接触が、メッセージと話者に対する印象に与える影響を実験的に調査した。卒業試験導入を主張する話者が映った動画を参加者に視聴させ、話者とメッセージの印象を評定させた。動画は、話者の自己接触（くつろぎ型・神経質型・なし）と論拠（強・弱）の2要因を操作して作成した。その結果、自己接触はその種類にかかわらず、話者の信頼性評価を低め、メッセージの印象には影響しないことが明らかになった。

キーワード：ジェスチャー (gesture), 自己接触 (Self-touch)

1. はじめに¹

本研究は発話に伴う自己接触が、話者とメッセージに対して聞き手が抱く印象に与える影響を明らかにする。自己接触とは、自身の顔や体に触れる動作であり、様々な心理的機能をもつ (Ekman & Friesen, 1969)。たとえば、緊張やストレスに直面した状況下でのストレス緩和 (Dreisöerner et al., 2021; 牧, 2023) や、注意制御 (Barroso, Freedman, & Grand, 1980)、語彙検索 (藤井, 1997) への寄与が知られている。一方、自己接触の対人的な機能として、Maricciolo et al. (2009) は自己接触を行いながら話す話者は、自己接触をしない話者と比較して、落ち着きがないとネガティブな印象を与える一方で、メッセージの説得力では、高く評価されることを示した。すなわち、自己接触は、話者とメッセージ、両方の評価に影響しうる。しかし、Maricciolo et al. (2009) の実験では、自己接触の仕方が厳密に統制されていなかった。そのため、どのような接触の仕方が、どのような影響を与えるのかは十分に明らかになっていない。

本研究では、自己接触の下位分類として、「くつろぎ型」と「神経質型」の自己接触の分類を採用した (森・神田, 2013; 本研究で用いた動作は図1参照)。Ishioh and Koda (2016) は、自己接触をおこなうアバターを評定させる実験から、神経質型の自己接触がネガティブ

な印象を、くつろぎ型の自己接触がポジティブな印象を与えることを報告した。具体的には、神経質型の自己接触は、情緒の不安定さを示す、社会的に望ましくない行動として評価された。他方、くつろぎ型の自己接触は、親しみやすさ、知性、情緒的安定を示す行動として評価された。ただし、Ishioh and Koda (2016) はアバターの自己接触行動を対象にしたものであったため、人間の話者の場合、両種の自己接触のあいだにどのような対人的な機能の違いがあるのかは明らかになっていない。

以上より本研究では、話者の自己接触のタイプによって、話者とメッセージに対して聞き手がもつ印象が異なるのか、実験的に明らかにすることを目的とする。本研究では次の2つの仮説を検証した。

- (1) 話者がくつろぎ型の自己接触をした場合、神経質型の自己接触をした場合と自己接触をしなかった場合と比較して、話者のメッセージの説得力は高く評価されると予想される。
- (2) Maricciolo et al. (2009) の結果より、話者が自己接触をした場合、自己接触をしなかった場合と比較して、話者の印象は悪くなると予想される。

2. 方法

参加者は日本語を母語とする大学生および大学院生60名であり ($M_{age}=20.83$ 歳, $SD=3.27$ 歳, 女性35名)、各条件に10名ずつ割り当てられた。いずれの参加者も刺激動画を問題なく視聴できる正常な視力、または矯正視力を有していた。

Maricciolo et al. (2009) の刺激を参考に、大学生の視聴者に卒業試験制度の導入を訴える、約2分の動画を作成した。話者役は演劇経験のある男性1名だった。自己接触の仕方について3水準、論拠の強弱について2水準を組み合わせ、6種類の動画を作成した。

自己接触の仕方は、くつろぎ型、神経質型、接触なし

¹ 本稿は、第3著者の指導の下、第2著者が早稲田大学人間科学部2024年度卒業論文として執筆した原稿（未公開）を

第1著者が追加分析を含む加筆・修正を行ったものである。

の3種類であった。動作の詳細は Ishioh and Koda (2016) を踏襲した (図1)。

図1 くつろぎ型(上段)と神経質型(下段)の自己接触



註) 各画像の動作は次の通り。くつろぎ型条件：①髪を触る，②顔を触る，③鼻を触る。神経質条件：④頭を搔く，⑤首を搔く，⑥顎を搔く。

論拠の強弱は，強いか弱いかの2条件であった。論拠の強い条件では，発話末尾を「べきである」「である」といった形にし，卒業試験の便益として学生自身の能力の向上などに言及させた。論拠の弱い条件では，発話末尾を「と思われる」「らしい」といった形にし，卒業試験の便益として学生が得る名声と，大学の経営などに言及させた。

実験参加者は，卒業試験を導入することに関する調査と説明されて実験に参加した。まず，卒業試験の導入に対する賛否，評価，卒業研究に対する優劣，社会にとっての便益，学生にとっての便益について動画視聴前に回答させた。それぞれの条件に対応した動画を1回視聴させた後，上記5項目と，メッセージの説得力，話者の印象について，質問紙に回答させた。動画視聴後，真の目的について開示して，実験を終了した。

独立変数は，話者の「自己接触の仕方」と「メッセージの論拠の強弱」とを参加者間要因とした，二要因であった。従属変数として，メッセージおよび話者を評価するための質問紙の得点を用いた。メッセージ評価については，卒業試験導入に対する賛否，評価，卒業試験の卒業研究に対する優劣，社会に対する便益，学生に対する便益，メッセージの説得力の6項目で測定した。話者評価については，友好，興味，楽しさ，穏やかさ，落ち着き，自信，有能さ，専門性，信頼，シャイ，好意，ストレス，親切さ，積極性，疑念，威圧感の16項目で測定した。いずれについても7件法で測定した。

3. 結果

3.1. メッセージに対する印象

自己接触行動と論拠の質が説得的メッセージに対す

る印象に与える影響を明らかにするため，卒業試験の導入に対する賛否，評価，卒業研究に対する優劣，社会にとっての便益，学生にとっての便益について，動画視聴前の評点と動画視聴後の評点を参加者ごとに差得点を求めた。それら差得点とメッセージの説得力の平均値について，二要因参加者間分散分析を実施した。説得力の項目のみ，論拠が強い条件が弱い条件より有意に高かった ($F(1, 54) = 6.93, p < .05, \eta_p^2 = .11$)。自己接触の種類および交互作用については，いずれの項目についても有意な効果はみられなかった ($ps > .05, \eta_p^2 < .07$)。したがって，自己接触の種類がメッセージに対する印象に影響を及ぼすとは言えない。

3.2. 話者に対する印象

自己接触行動と論拠の質が話者に対する印象に与える影響を明らかにするため，探索的因子分析と因子得点の分散分析を実施した。はじめに，解釈可能性を保ちつつ，話者の印象に対する項目全体の評点を縮約するために探索的因子分析を実施した。十分な因子負荷量を示さなかった項目を除外し，13項目を採用した。最終的な因子分析の結果を表1に示す。

2つの因子はそれぞれ，信頼性と社交性と命名した。第一因子は，落ち着き，自信，有能さといった項目に高い因子負荷量を示していることから，信頼性と解釈した。第二因子は，友好性，興味，好ましさといった項目に高い因子負荷量を示していることから，社交性と解釈した。各参加者の因子得点について，図2に示した。

信頼性の因子得点について，二要因参加者間分散分析を実施した。自己接触の種類 ($F(2, 54) = 50.548, p < .001, \eta_p^2 = .652$) と，交互作用 ($F(2, 54) = 3.543, p = .036, \eta_p^2 < .116$) の効果が有意であった。論拠の強さ ($F(1, 54) = 0.543, p = .447, \eta_p^2 = .011$) の効果は有意ではなかった。自己接触の種類の単純主効果は，論拠の強弱にかかわらず有意であった (論拠強: $F(2, 54) = 25.953, p < .001, \eta_p^2 = .490$, 論拠弱: $F(2, 54) = 28.137, p < .001, \eta_p^2 = .510$)。論拠の強さの単純主効果は，くつろぎ型においてのみ有意であった ($F(1, 54) = 6.540, p = .013, \eta_p^2 = .108$)。一方で，神経質型 ($F(1, 54) = 1.100, p = .299, \eta_p^2 = .020$) と統制群 ($F(1, 54) = 0.033, p = .856, \eta_p^2 < .001$) においては有意でなかった。

自己接触の主効果についての多重比較の結果，話者に対する評価は，接触なし条件が他条件よりも有意に高く (接触なし-くつろぎ型: $t(54) = 7.471, p < .001, d = 2.03$, 接触なし-神経質型: $t(54) = 9.563, p < .001, d = 2.60$, 以降すべて Holm 法による調整済 p 値)，くつろ

表 1 話者に対する印象評価における因子分析の結果

話者に対する印象評価項目	因子負荷量	
	1	2
因子1：信頼性		
5. 落ち着いていないー落ち着いている	.94	-.10
6. 自信がないー自信がある	.84	-.07
7. 有能でないー有能である	.81	.14
12. ストレスを感じるーストレスを感じない	.49	.22
15. 疑わしいー疑わしくない	.48	.37
14. 消極的であるー積極的である	.46	.20
因子2：社交性		
10. シャイであるーシャイでない	.43	-.14
1. 友好的ではないー友好的である	-.21	.81
2. 興味がないー興味がある	.09	.74
11. 好ましくないー好ましい	.40	.56
13. 親切でないー親切である	.25	.49
9. 信頼できないー信頼できる	.33	.47
3. 楽しそうでないー楽しそう	-.19	.46

ぎ型条件が神経質型条件よりも有意に高かった ($t(54) = 2.092, p < .041, d = 0.57$).

論拠が強い場合の自己接触の単純主効果についての多重比較を実施した結果も同様に、接触なし条件が他条件よりも、また、くつろぎ型条件が神経質型条件よりも高かった (接触なしーくつろぎ型: $t(54) = 3.913, p = .001, d = 1.06$, 接触なしー神経質型: $t(54) = 7.195, p < .001, d = 1.96$, くつろぎ型ー神経質型: $t(54) = 3.282, p = .002, d = 0.89$). 他方、論拠が弱い場合の自己接触の単純主効果についての多重比較を実施した結果、接触なし条件が有意に高かったが (接触なしーくつろぎ型: $t(54) = 6.652, p < .001$, 接触なしー神経質型: $t(54) = 6.329, p < .001, d = 1.81$), くつろぎ型条件と神経質型条件の間に有意差はみられなかった ($t(54) = 0.324, p = .747, d = 0.09$).

社交性の因子得点についても二要因参加者間分散分析を実施した. その結果, いずれの効果も有意でなかった ($ps > .05, \eta_p^2 < .037$).

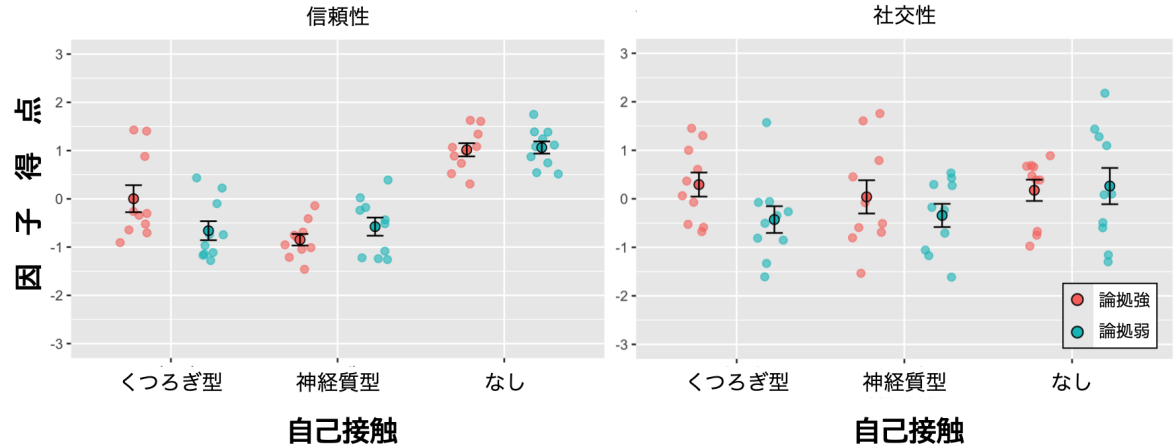
以上より、自己接触はくつろぎ型か神経質型かにかかわらず、話者に対する信頼性評価を低めた. 論拠が強い場合、くつろぎ型の自己接触をした話者に対する信頼性評価は、緊張型の自己接触をした話者より高かったが、自己接触をしなかった話者には及ばなかった. 一方、論拠が弱いと、自己接触の種類にかかわらず、信頼性評価は自己接触がない話者より低かった. さらに、神経質型の自己接触をした場合と自己接触がなかった場合、論拠の強弱は話者の信頼性に影響しなかったものの、くつろぎ型の自己接触をしていた場合は、論拠が強いと信頼性が高いと評価された.

4. 考察

メッセージに対する印象について、仮説1に反して、自己接触はメッセージに対する印象に影響しなかった. 話者に対する印象について、仮説2は支持された. 自己接触のタイプにかかわらず、自己接触をした話者に対する聞き手の印象は、自己接触をした話者に対する印象と比較して低下した.

メッセージに対する印象の結果は、先行研究と異なっていた. Maricciolo et al. (2009) は、話者が自己接触をしている場合、話者が自己接触をしていない場合に比べ、メッセージの説得力は高く評価されると報告した. 一方で本研究では、自己接触の効果は有意でなく、効果量も低かった. この不一致に対する1つの説明は、刺激動画の主題の異なりである. Maricciolo et al. (2009) では学費の値上げが主題となっており、動画視聴前における賛否度は7件法で平均2.04点 (SD=1.16点) であった. 本研究では学費を自身が払っていない学生の存在を考慮して、卒業試験を主題としたが、動画視聴前の賛否度は平均3.33点 (SD=1.39点) と、Maricciolo et al. (2009) より高かった. したがって、本研究では、説得によって賛否度が変わる余地が Maricciolo et al. (2009)

図 2 自己接触の信頼性因子と社交性因子の因子得点の分布. 濃色の点は平均値, エラーバーは標準誤差.



よりも少なかったため、結果が再現されなかった可能性がある。

話者に対する印象の結果は、おおむね、先行研究に合致していた。Maricciolo et al. (2009) は、話者が自己接触をしている場合、自己接触をしていない場合に比べ、話者の Composure (Calm, Confident, Relaxed などの項目の因子負荷量が高い因子) が悪くなることを示した。本研究の結果も同様であり、話者の信頼性(落ち着き、自信、有能さなどの項目から成る因子) に対する印象を自己接触が低下させることを示していた。

さらに、本研究では、自己接触の種類にかかわらず、自己接触をした場合の信頼性評価は、自己接触をしない場合よりも低下することが明らかになった。このことは、話者の自己接触は、その触り方や触る部位にかかわらず、話者に対する印象を低下させることを示唆している。ただし、くつろぎ型の自己接触での低下は、神経質型に比べて抑えられていたため、自己接触の仕方によって信頼性評価の低下の度合いが異なると考えられる。

加えて、論拠の強さと、自己接触の仕方のあいだには交互作用が認められた。自己接触の効果は、論拠の強弱にかかわらず同程度であったのに対して、論拠の強さの効果はくつろぎ型でのみ認められた。すなわち、説得者の話し方や話す内容の曖昧さによって信頼性評価が低下するのは、話者がくつろぎ型の自己接触をしている場合のみだった。この結果に対する1つの説明は、話者がくつろぎ型の自己接触をしている場合、論拠の強さが、リラックスして自信が持てるだけの根拠に基づいて話しているという好印象を与えた、というものである。ただし、当該条件の評価は自己接触なし×論拠弱の条件よりも低かったため、自己接触をすること自体によって損なわれた信頼性を覆すほどの交互作用効果はないと考えられる。

以上の結果に加え、論拠の強さより自己接触の効果が一貫して高かったことを考慮すると、自己接触行動が話者の信頼性評価に与える影響は、論拠の強弱の影響よりも大きかったと考えられる。

加えて、話者の社交性に対する印象(友好性、興味、好ましさなどの項目の因子負荷量が高い因子) についても、先行研究と同様の結果がみられた。Maricciolo et al. (2009) では、話者の Warmth (Pleasant, Friendly, Interesting などの項目の因子負荷量が高い因子) について、身振りの種類の効果は認められなかった。本研究においても同様に、自己接触の種類の効果は認められな

かった。

本研究の結果は、話者に対する印象のうち、自己接触の種類が効果を及ぼすのは、特定の印象に限られることを示唆している。この点は、幅広い印象について、神経質型とくつろぎ型の自己接触の間の印象評価に差がみられることを報告した Ishioh and Koda (2016) と一貫していない。ただし、Ishioh and Koda (2016) はアバターへの印象に自己接触行動が与える影響の調査であり、説得状況でもなかったため、単純な比較はできない。したがって、自己接触の効果が及ぶ印象が、他の状況でも話者の能力(本研究であれば信頼性)にかかわる印象に限られるのか否かを明らかにすることは今後の課題である。

本研究では、説得的メッセージを発する話者の自己接触行動の種類が、メッセージと話者に対して聞き手が抱く印象に与える影響を明らかにした。メッセージに対する印象について Maricciolo et al. (2009) の結果は再現されなかった。一方で、話者に対する印象は、種類にかかわらず自己接触行動によって低下していた点で、Maricciolo et al. (2009) の結果はおおむね再現された。しかし、本研究は、自己接触以外の非言語行動については統制を行い、説得状況のみを対象としているため、他の非言語行動との交互作用や異なる状況での効果については明らかになっていない。今後は、それらの要因も考慮した上で、自己接触行動が話者の印象に与える影響を明らかにしていく必要がある。

文献

- Barroso, F., Freedman, N., & Grand, S. (1980). Self-touching, performance, and attentional processes. *Perceptual and Motor Skills*, 50(3), 1083–1089.
- Dreisoerner, A., Junker, N. M., Schlotz, W., Heimrich, J., Bloemeke, S., Ditzen, B., & van Dick, R. (2021). Self-soothing touch and being hugged reduce cortisol responses to stress: A randomized controlled trial on stress, physical touch, and social identity. *Comprehensive Psychoneuroendocrinology*, 8, 100091.
- Ekman, P., & Friesen, W. V. (1969). The repertoire of nonverbal behavior: Categories, origins, usage, and coding. *Semiotica*, 1(1), 49–98.
- 藤井美保子 (1997). 語彙検索における自己接触行動の役割. *心理学研究*, 68(3), 187–196.
- Ishioh, T., & Koda, T. (2016). Cross-cultural Study of Perception and Acceptance of Japanese Self-adaptors. *Proceedings of the Fourth International Conference on Human Agent Interaction*, 71–74.
- 牧恒平 (2023). 自己接触行動がストレス低下に与える影響. 早稲田大学大学院人間科学研究科修士論文. (未公刊)
- Maricciolo, F., Gnisci, A., Bonaiuto, M., & Ficca, G. (2009). Effects of different types of hand gestures in persuasive speech on receivers' evaluations. *Language and Cognitive Processes*, 24(2), 239–266.
- 森裕子・神田智子 (2013). 身体操作を行うエージェントとの共同タスク遂行インタラクション. HAI シンポジウム 2013, 275–281.